

課長はヒミツの御曹司

目次

課長はヒミツの御曹司

5

桜色の君を

231

課長はヒミツの御曹司

プロローグ 裏切りとお嬢様の決意

「んっ……」

ぴちゃぴちゃと卑猥な音が、細く開いたドアの隙間から聞こえる。漏れ聞こえてくる衣擦れの音も、甘い喘ぎ声も、熱い吐息も、全てにまるで現実味がなかった。

僅かに見えるのは、ソファの上で抱き合い、何度も熱いキスを交わしている男女。上着を脱いだ男性の白いシャツの背中に、女性の手が回っている。こちらに背を向けている男性の顔は見えないが、彼を見上げている女性の頬は赤く染まっていた。

「——いいの？ 婚約者を放っておいて」

誘惑の響きが含まれた声に、聞き慣れた低い声が答える。

「彼女は何もできない、綺麗で可愛いお人形だ。会長が目に入れても痛くないほど可愛がっている孫娘で、大人しくて俺の言いなり。妻としては理想的だろ？ だが——」

「あんっ」

「俺は、お前のような強い女が好きだ」

——好き。

ドア越しに聞いたその言葉が鋭い刃となって、鷹司桜の胸を切り裂いた。

「……悪い人ね。結婚しても私とこんなこと、するつもりなんでしょう？ 彼女が知ったら、どうなるかしらね？」

「どうもしない。あのお嬢様は泣くくらいしかできないだろう。まあ、泣かせるのは本意ではないから、バレないようにちよつと気を付ければいいだけだ」

「ふふっ……」

「もういいだろ？ 今はお前の甘い肌を堪能したい」

その後聞こえてくるのは、もはや声ではなかった。経験のない桜が聞いても、男女の秘め事の音だとすぐに分かる。いつの間にか桜は、ドアと反対側の廊下の壁に背中を押し付けていた。足がぐがくと震えている。口もとに当てた右手の指も、冷たく強張った。

立派なドアの向こうは、専務室だ。中にいる女性は、専務の専属秘書の富永沙穂。そして男性は、三好真也。若くして営業部から出世したやり手の専務で——

——桜の婚約者、だ。

「——はあっはあっ……」

重い金属製の扉を引いて、桜は屋上に出た。

真冬の空気が、荒い息を白く染めている。ゆるくウェーブした栗色の髪や白いコート、薄い花柄

のワンピースの裾を揺らして、冷たい風が通り過ぎていった。

思った通り、そこには誰もいない。今はまだ昼休みが終わったばかりで業務時間中だ。黒い金網のフェンスに囲まれたコンクリートの箱庭に、わざわざ来る物好きはいないだろう。

小さい頃、祖父に連れられてこの会社に来た時は、ここを秘密基地にしていた。その時から変わらない、誰もいない光景が広がっている。

「うっ……」

嗚咽が口から漏れた。人目に付かない場所を探すまでは、と我慢していた涙が、ぼろぼろと零れ落ちる。

「ひっ……う、うっ……っ」

両足から力が抜けた桜は、その場にべたんと座り込んだ。氷みたいに冷えたコンクリートの温度も、今は感じない。

流れる涙を拭きもせず、心臓を串刺しされたかのような痛み、背中を丸める。灰色のコンクリートの上に落ちた涙が、ぽつんぽつんと小さな染みになった。

胸が痛い……重い……

——何もできないお人形。

（それがあの人……真也さんの本心……？ だったら、今まで優しくしてくれた……のは）

鮮やかな彼の笑顔が目につかぶ。引き締まった口元が綻び、やや吊り目気味のまなじりが下がる、その顔が好きでたまらなかった。でも、あの笑顔は……

（私が……お祖父様の孫で、お父様の一人娘、だからなの……？）

この会社、鷹司コーポレーションの会長は桜の祖父で、社長は父だ。つまり、桜の結婚相手は次期社長になる可能性が高く、祖父は桜の結婚相手を重要視していた。

桜自身は引つ込み思案で大人しく、どちらかといえば若い男性は苦手だ。それもあって祖父が『僕が いい 相手を探してやらねば！』と張り切り、専務の中でも若くやり手の真也を桜に紹介してくれた。

『桜さんはとても綺麗ですね。まるでお姫様のようだ』

真つ直ぐな黒髪を短く切り揃え、前髪はオールバック、きりつとした太めの眉に意志の強そうな瞳が印象的な真也は、華やかで大人の魅力を纏う男性だ。祖父に紹介された時、微笑む彼を前に頬を染めてしまったのは、桜のほうだった。

その後のお見合いの場で、緊張して口々に口もきけない桜を他愛ない話で笑わせてくれたことを覚えている。

『——桜。大学を卒業したら、すぐにでも結婚してほしい。貴女みたいな素敵な女性は、繋ぎ止めておかないと奪われてしまう』

彼からプロポーズされた時、どんなに嬉しかったか。

十歳以上も年上の彼が自分を選んでくれるなんて、桜は信じられなかったが、『桜の素直で可愛いとこころに惹かれた』と言われて頷いたのだ。

優しく笑う真也は、いつだって紳士的で、桜を大切に扱った。

仕事で忙しい彼とは滅多に会えないもの、お洒落でセンスのいいアクセサリーをプレゼントしたり、時には花束を持って訪ねてきたりと、小まめに連絡をくれる。

そんな真也をますます好きになった桜は、大学に通う傍ら花嫁修業に精を出していたのだ。

卒業まであと三ヶ月となった今日。ウエディングドレスが出来上がったとの連絡を受け、桜は試着をしようと挙式予定のホテルに向かっていた。

白いサテン地とレースを重ねた生地我真珠を散らしたパフスリーブのドレスはびったりと身体に合い、皆に『お綺麗ですわ!』と褒められる。

そこで自分のスマホで写真撮ってもらい、一刻も早く真也に見せようと、お昼休みが終わったばかりの会社を訪ねたのだ。

彼が専務室にいと聞いた桜は、彼を驚かさそうと思い付き、連絡を断ってエレベーターで役員フロアに行った。ところが、足取り軽く専務室に着き、ノックをしようとした時に、いつもは閉まっているドアが少し開いていることに気が付く。

そして、そのドアの隙間から聞こえてきたのだ——淫らな音が。

「——真也、さん……」

彼の秘書である沙穂の顔がちらつく。ストレートの黒髪を一つに束ね、アーモンド形の目が人目を惹く美人。

いつもほんのり赤みが入ったルーージュをひいている彼女は、見るからに『仕事ができる秘書』で、真也も彼女を信頼している様子だった。専務室を訪ねた時に応対してもらったことが何度かある桜は、無駄なくテキパキとした沙穂に、とても感心したので覚えている。

『専務、会議が始まりますわ。ご準備を。申し訳ございません、桜様。何分専務はお忙しくて』

そう言って微笑む沙穂に、実のところ桜は気後れしていた。沙穂は営業部からキャリアを積んで秘書になった大人の女性で、桜を見る瞳に侮るような色を時折浮かべるせいだ。

もちろん、あからさまな態度を彼女が取ったことは一度もなく、真也も祖父も父も何も気付いていない。幼い頃から『鷹司のお嬢様』という目で見られてきたお陰で、周囲の視線に敏感になっている桜だから感じる事ができただけだ。

——もしかして、仕事の忙しい真也さんが私の我儘に付き合わされてるって思っているのかしら？

(そう考えていたけれど)

ふっ、と桜は自嘲気味に唇を歪める。

沙穂が自分を快く思っていなかった原因は、そんなことじゃなかった。自分の恋人が桜と結婚しようとしているからだ。

沙穂と自分では全くタイプが違う。小柄で幼く見られがちな桜は、沙穂のような大人の美人ではない。

「真也さんは……」

——彼女は何もできない、綺麗で可愛いお人形だ。

——結婚しても私とこんなこと、するつもりなんでしょう？

心臓を締め付けられる痛みに、桜は右拳みぎこぶしを胸に当てた。真也は結婚後も、沙穂と関係が続ける気……らしい。

(私が……)

何もできないから？

お人形だから？

社長令嬢だから？

彼女が強い女だから？

彼女を好きだから？

——だから、好きでもない私と結婚して……彼女とも……？

涙が止まらない。熱くなつた喉の奥から、また嗚咽おえんが漏れた。

「——こんなところで座り込んで、風邪引くよ？」

聞き慣れない男性の声にびくつと肩を揺らした桜は、表情を取り繕とつとえない状態で顔を上げた。

まず目に入ったのは、グレーのスラックスと、緑色のちり取りを持った左手だ。視線を上げると、灰青色はいあおいろの作業着に笑みを浮かべた唇、そしてまさつとした濃い茶色の髪で半分隠れた顔が見える。

すつと桜の前に座つた男性は、上着のポケットから青いハンカチを取り出し、彼女に手渡す。

「あ……」

桜はぎゅつとそのハンカチを握り締めた。右手で受け取つたハンカチの輪郭りんかくが滲にじむ。

「怪我けが、してるわけじゃなさそうだね。立てる？」

大きな右手が差し出された。その指先は黒く染まっている。桜がぼんやりと彼の手を眺めていると、彼はちり取りを床に置いた。

「え……きゃっ!？」

ふわつと桜の身体が浮く。がっしりとした腕が彼女の身体を抱き上げていた。

びっくりした桜が左上を見ると、長い前髪の間から綺麗な瞳が見える。

「いきなりごめん。でも、かなり身体冷えてるよね、顔色も悪いし。ここにるのはまずい」

「え、あの……」

桜を抱きかかえた男性は、すたすたと歩き始めた。驚きのあまり、桜はされるがままになる。

「医務室に行くほどでもないと思うから、とりあえず俺の部署に連れていくね」

「は、はい……?」

頭の中がぐるぐると回り、何が何だかよく分からない。混乱こんらんし口籠くちかごもっている間に、男性は桜を抱いて器用にドアを押し開け、階段を下り始めた。

彼の足取りは確かで、かんかんかんと軽やかな音が階段に響く。いつの間にか涙が止まっていることに気付かず、桜は大人しく運ばれたのだった。

湯気の立つマグカップに口を付けると、ココアの甘さが身体中に染み渡る気がした。

お姫様抱っこされて呆然としていた桜が我に返った時には、男性はもうこの部屋の前にいた。エレベーターを使わずに、屋上から非常階段を下りたのだ。

「よいしょっと」

専務室と比べると簡素なドアの前で、男性は桜を下ろす。そしてドアを開けると、中に入るようにと伝えた。

「麻奈さん、この子にホットココア淹れてくれるー？ あ、しばらくここで休んでね」

恐る恐る中に入った桜は、男性と同じ作業用の上着を着た、小柄な女性に迎えられる。白髪交じりの髪をふわりと肩に下ろした彼女は、桜を見ると目を丸くした。

「あらあら、あなた真つ青な顔してるじゃない！ 女に冷えは大敵よ！ さ、こちらに来て座ってちょうだい」

あれよあれよという間に部屋の中央にあるストーブの前に案内される。桜は出してもらった椅子に座り、冷たく強張った手をストーブにかざした。すると、「はい、ミルクココアよ。あつたまるから」と真つ赤なマグカップが差し出され、現在に至ったのだ。

「あ、りがとうございます……」

湯気もカップも温かい。

ほう、と溜息をついた桜の横で、女性がふふふと笑った。

「課長、いつも何かしら拾ってくるんだけど、こんな可愛いお嬢さんを連れてくるなんて！ ちよっと見直したわ」

「課長、つて？」

ふと見ると、さっきの男性がいない。桜は膝の上に置いたハンカチをちらつと見た。

「八神彬良課長。この備品在庫課のトップよ。私は中谷麻奈。よろしくね、鷹司さん」

「はい、よろしくお願ひします……す？」

そう言つて、桜は小首を傾げた。目の前で微笑む女性に見覚えがあるような気がする。

（どこでだったかしら……？）

「さあ、ココアを飲んで温まってちょうだい。課長ならすぐに戻ってくるから」

言われるがまま、桜はマグカップからココアを一口飲んだ。優しい味が口の中に広がる。冷えた切った身体には、甘い温かさがご馳走だった。

そして桜は周りを見回す。

ここは物置だろうかと思うほど、物が多く広い部屋だ。入り口から見て奥側が窓、両方の壁に備え付けの棚があり、その上にはプラスチック製の引き出しがずらりと並んでいる。『消しゴム』『シャープペンシル』『三色ペン』など、備品と思われる名称が、引き出しにシールで貼ってあった。

（備品在庫課って、備品の管理をする部署なのかしら？ たくさん在庫が……）

桜が座っている椅子が元々置いてあった机は、二台ずつ縦二列に並べられていたうちの一つ。その机の奥側、お誕生日席の机に『課長 八神彬良』と書かれた卓上ネームプレートが置いてある。

「どう？ 少しは温まったかしら？」

麻奈がにこにこ話しかけてきた。

「は、はい。大丈夫です……」

桜が答えるのと同時に、ぱたんと入り口のほうから音がする。振り返ると、さっきの男性——八神がちり取りを持って部屋に入ってくる場所だった。彼は桜の傍まで来て、にっこりと笑う。

「ああ、随分顔色が戻ったね。良かった」

麻奈がすつと八神の隣に立ち、机のほうを指さして言った。

「課長、営業部から例の話が来てましたよ？ さっさと済ませてください」

「はいはい。——ここなら人の出入りは少ないし、ゆっくりしていけばいいよ、鷹司さん」

八神はぼんと桜の頭を軽く叩くと、自席へ歩いていく。その後ろ姿をぼーっと見ていた桜は、はっと気が付いた。

「あの！ 私、名前を」

椅子に座った八神が、桜に顔を向ける。

「鷹司桜さん——会長の孫娘で社長の娘さん、でしょう？ 写真と同じだからすぐに分かったよ」

「写真、ですか？」

「あれ、知らないの？」

八神の口の端がにと上がった。

「会長、君を溺愛してるよね。成人式の振り袖姿の写真、スマホの待ち受けにしている——『桜はこんなに綺麗なだけでなく、心根も優しい娘なんだ』って自慢してるんだよ。俺も自慢されたことがあるから」

（おとお、お祖父様ーっ！）

かっつと桜の頬に熱が上った。確かに祖父は、一人しかいない女孫である桜を可愛がってくれているが……社員にまで自慢していたなんて。

「まあ、いいんじゃないかしら。会長の親ばか……いえ、爺ばかは今に始まったことじゃないし」

麻奈が笑いながら、ほかほかのタオルを桜に差し出した。桜はお礼を言っつてマグカップを机に置き、タオルを受け取る。顔を拭くと、じわりと温もりが肌に伝わってきた。

「あの……本当にありがとうございます。助かりました」

桜が頭を下げると、「いいよ、気にしないで」と八神が笑う。タオルを桜から受け取った麻奈もにこやかに言った。

「本当に素直な、いいお嬢さんねえ。可愛がっている会長のお気持ち分かるわ」

——素直な、いいお嬢さん。

その言葉がずきんと胸の奥を刺す。桜は咄嗟に目を伏せ下唇を噛んだ。

（真也さんは……お人形さんだつて……）

思い返せば、彼に『好きだ』と言われたことは一度もない。『綺麗な』『可愛い』……そう言われ

るのが嬉しくて……だから、今まで気付かなかったのだ。

(本当は、沙穂さんみたいな人が好きなのに、無理して私に付き合ってくれてたのね)
くすりと小さく笑う沙穂の顔が目には浮かぶ。

今の自分——何もできないお人形では、彼に好かれたいのだろう。だけど、どうしたらいいのか、分からない。

「どうしたの？」

「えっ」

目の前に、机に座っていたはずの八神がいる。彼は桜の横に屈み込み、じつと彼女を見つめていた。

「言いたくないなら言わなくてもいいけど……何か悩みがあるんじゃないかな？」

「っ」

びくつと身体を震わせた桜に、八神は穏やかに言葉を続ける。

「ここには麻奈さんと俺以外に誰もいない。君からしたらおじさんだろうけど、相談に乗るくらいはできるよっ」

麻奈が両手を腰に当てて、八神に文句を言う。

「課長、それ私への嫌味かしら？ まだ三十五歳の若造のくせにおじさんだなんて」

(三十五……)

真也と同じ年だ。もしかして、同期なのかもしれない。

鋭い印象の真也とは違い、ふわつとした雰囲気のある八神。泣いていた桜をここまで連れてきて、面倒をみてくれた。長い前髪で顔はよく分からないものの、口元は優しく微笑んでいる。

(それに——)

自分が『鷹司桜』だと知っていても、普通の態度だった。麻奈もそうだ。桜に媚びることなく、『一人の女性』として扱ってくれている。

膝の上に置かれたハンカチ。桜はそれを右手でそつと握ってみた。ほんの少し、右の手のひらが温かくなった気がする。

——この人達なら、信じられる。

会ったばかりで何の根拠もないけれど、そう思える。

桜は大きく息を吸って、吐いた。ゆっくり八神の顔を見る。そして——何とか声を絞り出した。

「……私……何も、できないんです……」

「え？」

首を傾げた八神の前で、桜は俯く。

「祖父や……父に、頼ってばかり、で……お人形さん……だって……」

八神は黙ったまま、話を聞いている。

「仕事、ができる大人の、女性じゃ……ないし、引つ込み思案、で……」

自信に満ちた笑みを浮かべる沙穂の顔がちらつく。

そう。仕事ができ、美人で華やかな、あんな女性だったら——

(きつと、『好きだ』って言ってもらえたんだ……真也さんに)

喉の奥に熱いものがせり上がってくる。じわりと視界が滲んだ。

「だ、から……好き、になつて……もらえな」

震える両手が、ふいに大きな手に包まれた。温かく、たこのある硬い感触が伝わってくる。

「鷹司さん」

八神の声が近くで聞こえた。桜は俯いたまま、顔を上げられずにいる。

「君は何もできないんじゃない」

「……っ!？」

「やったことがないだけだよ。経験不足なんだ」

「え……?」

経験不足——その言葉に、桜は八神を見た。彼は穏やかに頷く。

「確か、まだ大学生だよな? 社会に出たことがないなら、仕事ができなくて当たり前だし、保護者にだって頼つていい」

八神がそっと右手を伸ばして、桜の膝の上のハンカチを取り、いつの間にか濡れていた彼女の頬を拭いた。長い指がゆつくりとその頬を撫でる。

「それに君はお人形なんかじゃないよ。ほら、こんなに悲しんでいるじゃないか。お人形なら何も感じないはずだ」

「……あ……」

左頬に当たる温かい手。その手の感触を、確かに桜は感じている。

ふと、前髪の間から八神の目が見えた。綺麗な漆黒の瞳がじつと自分を見つめている。穏やかで優しいその瞳に、吸い込まれそうだ。

「もし君が……何もできないと言われたのが嫌だったのなら、やってみればいい。自分からやってみて、初めてできるかできないかが分かるんだよ」

「えっ?」

桜は大きく目を見開いた。

(私、が? そう……だ、これまで私は、自分から何かをしたことがなかったわ……。真也さんとの婚約は、向こうから申し込まれて、それを受けただけ。好きと言われていないけれど、私だって真也さんに好きだって言つてない。自分の気持ちを伝えたことすら、ないじゃない……)

このまま結婚してしまってもいいの? お人形扱いされたまま、真也さんが……あの人と恋人同士のまま……

そう考えた瞬間、どくりと心臓が跳ねる。

——嫌、だ。

桜の心の奥底で、小さな声がする。そう……このままじゃ、嫌。

お人形扱いされるのも。今のまま結婚するのも。何もできないって思われたままなもの。

(じゃあ、どうしたらいいの?)

何もしなければ、春には結婚するのだ——あの人を好きな彼と。

(嫌……っ……！)

心臓が締め付けられるみたいに痛む。

桜はぎゅっと膝の上で拳を握り締めた。少なくとも、彼に好かれる女性にならないと、結婚なんてできない。

『何もできないと言われたのが嫌だったなら、やってみればいい』

八神の言葉が、桜の頭の中で響く。

自分からやってみる。

(沙穂さんみたいに大人で、仕事もできる女性だったら……真也さんは)

——自分を見てくれるように、なるのだろうか。

(私……)

ある考えが、心の底からゆっくりと浮かんでくる。

(私ができることは……)

『やったことがないだけだよ。経験不足なんだ』

胸に何とも言えない不安が広がっていく。

(私にできるの……？ 今まで自分から動いたことがないのに？ ずっと、お祖父様やお父様の言う通りにしてきたのに？)

でも……このままじゃ、嫌……！

唇を噛んだ桜を見た八神は、くすりと笑い、右手で彼女の頭をよしよしと撫でた。

「大丈夫。君ならできるよ。今だっっちゃんと自分の気持ちを言えただろう？」

ふっと桜の身体から力が抜けた。

彼女が考えていたことの答えをさらりと言った後、八神はまた穏やかに微笑む。

桜の胸の中から、灰色の不安が溶けて流れ出ていく。彼の温かい手と優しい声が、心を温かくしてくれた。心を抱き締められた、そんな気がする。

『大丈夫』

彼のそのたった一言が、桜の心を押しした。

「ありがとうございます」

八神の言葉を胸に仕舞って、小さく微笑む。そんな桜の頭を、彼はまた優しく撫でてくれたのだった。

実家に戻った桜は、真っ先に祖父のもとへ行った。リビングのソファに座って新聞を読んでいた祖父、鷹司源一郎は、桜を見て新聞を脇に置く。

羽織姿の彼は、白髪頭で顔が皺だらけになっても、眼光の鋭さは若い頃と変わらないと評判だ。

もっとも、今ここにいるのは、かつて役員達を一目で震え上がらせたという伝説を持つ厳しい会長ではなく、孫娘を溺愛している、麻奈曰くの『爺ばか』だ。

「桜。今日はどうしたんだ。ホテルから一体どこに行っていた？」

自分を心配そうに見上げる祖父を見て、罪悪感にも似た思いが桜の胸に込み上げる。その感情を振り切つて、彼女は姿勢を正した。

「お祖父様」

息を吸って吐いた後、ゆっくりと口を開く。

「――結婚を延期してください。……私、就職します」

1. できるように、なりたい

爽やかな風が吹く五月。

黒の上着とタイトスカートを着た桜は、鷹司コーポレーション本社で、立ち並ぶ秘書課の面々に頭を下げた。

「鷹司桜です。よろしくお願ひいたします」

彼女を見る皆の目は、必ずしも好意的なものではない。こそそと彼女を見ながら話をする先輩秘書の顔には、ばかにしたような笑みが浮かんでいる。

「お嬢様が腰かけ気分であつて、いい迷惑よね」

「彼女、働く必要なんてないんですよ？」

「専務、可哀そうよね。我儘に振り回されて」

聞こえてくる悪意の声。桜はそれに気付かないフリをした。

先輩達の言葉が聞こえるせいか、桜の隣に並んでいる同期の女性達も、どこか余所余所しい態度になっている。

そんな雰囲気の中、この秘書課での上司となった安藤課長がほとんど咳払いをして口を開いた。恰幅のいい彼は、緊張しているのか、だからだと流れる汗をハンカチで拭いている。

「今年は総勢五名の新人が入ってきました。皆でフォローして、彼らが一日でも早く業務に慣れるよう、取り計らってください。では、それぞれ指導担当を決めます」

新人の名が呼ばれた後、指導を担当する者が発表されていく。桜もじっと自分の順番を待った。

「鷹司さん」

「はい」

一歩前に出た桜に、安藤課長がどこか硬い笑顔で言う。

「あなたの指導担当は……富永さんになります」

(えっ)

桜が息を呑むと、すつと志穂が目の前にくる。桜よりも長身の彼女に、黒のパンツスーツはよく似合っていた。

彼女は桜を見下ろし、冷たい瞳で口もとに笑みを浮かべる。

「よろしく、鷹司さん。いずれあなたには三好専務の仕事を手伝ってもらいますから、そのつもりで」

(真也さんの!?)

胸に重い衝撃が走ったが、桜は辛うじて笑顔を作った。

「は、い……よろしくご指導をお願いします」

桜と沙穂の二人を交互に見た安藤課長が、また汗を拭く。沙穂の後ろにいる、他の秘書達の視線が桜に突き刺さった。悪意があるとしか思えない厳しい視線だ。

「——どうせすぐに辞めるんじゃないの?」

その声にぐつと身体が強張った瞬間——耳元で優しい声が聞こえた。

『大丈夫。君ならできるよ』

(八神……課長)

温かい大きな手の感触を思い出す。そう、少なくとも彼は信じてくれた。桜はできると。

その信頼を裏切りたくない。桜は深く息を吸って、吐いた。

(頑張るって決めたもの。何を言われたって、逃げないんだ)

顔を上げて、前を向く。決意を込めて、真っ直ぐに沙穂を見た。その視線を受け止めた、沙穂の唇が歪む。彼女の視線も、桜を突き刺しそうなくらい鋭い。

「じゃあ、こちらに来てもらえる? 仕事の段取りを説明するわ」

そんな沙穂を見つめ返した桜は、「よろしくお願いします」と頭を下げたのだった。

あの時——桜が八神の前で大泣きした日とは違い、今日は穏やかに晴れている。屋上のベンチに座っていても、ぽかぽかと暖かい。

(秘書課に来て、一週間……)

膝の上に広げたお弁当を食べながら、桜はぼんやりとこれまでのことを考え込んでいた。

——結婚を延期して、就職する。

そう宣言した後、祖父も父も、何があったのだと大騒ぎした。

もちろん、真也が浮気していたと告げれば、婚約破棄となり結婚はなくなっただろう。だが、そうなるも彼らの信頼を失った真也が失脚するかもしれない。沙穂もだ。特に祖父は桜に甘い。自分が孫娘に紹介した真也が彼の秘書と関係を持った、などと知ったら激怒する。真也達を首に、とても言いかねない。

(そんなこと、でき、ない……)

婚約していた半年の間、真也は桜に優しくかった。彼にとって偽りだったかもしれない。それでも心遣いが嬉しかったのだ。

家族以外で初めて優しくしてくれた男の人。食事や映画にも連れ出し、楽しい時間をくれた。

桜の心の中には、まだ彼が残っている。いつそ嫌いになれたのなら、良かったのに。

(何もできないお嬢様でなくなったら、私のことをちゃんと見てくれるかも……なんて、思ってしまうもの……)

胸が抉られるように痛くても、彼の笑顔や思い出までは忘れられない。

その彼から職を奪う——その覚悟はできない。

(未練がましいって分かつてはいるけれど)

結局桜は、真也と沙穂のことを伏せて、皆を説得した。

『何も知らないまま、結婚するのが嫌なんです。就職して、自分の力を試したいの』

桜はあくまで自分の我儘だと押し通した。

大人しい桜がそこまで望むとはと、祖父はびっくりしていたが、『いつも何も言わないお前が言うのなら』と最後は折れたのだ。父も母も、突然の宣言に驚いたものの、最終的には桜の気持ち優先してくれた。

突然結婚の延期を祖父から聞かされた真也には『何故だ!?』と詰め寄られたが、桜は彼から目を逸らし『自分の力を試したい』と答える。今までになく強硬な態度の彼女に、真也は訝し気な表情になった。

納得はしていない様子だったが、祖父が認めてしまった以上、自分が反対しても無駄だと悟ったのか、それ以上何も言っていない。

とはいえ、その時には、もうとつくの昔に就職活動の期間は終わっていた。アルバイトを探そうとしたところ大反対され、桜は祖父と父の縁故に継り、鷹司コーポレーションに就職。

そして、新人研修期間中、『鷹司』という苗字からすぐに素性がバレた。同期や講師を務める先輩社員達に、『どうして社長の一人娘が』と二線を引いた扱いを受けたのだ。それでも、無理やり就職したのだから、と桜は何も言わずに淡々と研修をこなした。

そうして一ヶ月の研修を終えた今日、配属されたのは、よりよって秘書課だった。

秘書に選ばれた他の同期達は、パソコン技能や英会話関係の資格を持っていて、外交的な人ばかり。その中で、秘書として役に立ちそうな資格や資質を、何一つ持っていない桜の存在は異色だ。

当然のように同期からも浮く。

『会長達が心配だとおっしゃったらしくてねえ。できるだけ役員に近い部署に、と保部長が心配したそうだよ』

安藤課長からこっそり教えてもらった桜は、苦い思いを胸に抱いていた。

保部長というのは、桜の従兄で人事部長の鷹司保のことだ。桜の配属には、おそらく祖父や父の圧力が掛かったのだろう。

祖父や父が自分を心配してくれているのは分かっている。秘書課は役員に接する機会が一番多く、見守りやすいと考えたに違いないことも。

(でも、真剣に秘書を目指している人から見たら、コネで秘書になった私は、良く思えないわよね……)

おまけに、指導担当が沙穂だ。

まずは社内業務からと、秘書課の社内メール当番や掃除当番を任されたものの、彼女の態度は丁寧ながら冷ややかだった。桜は引き攣った笑顔で受け答えしたが、親しく話すなんて到底できそうにない。

——人の恋人と婚約しておいて、結婚しないなんて、何考えてるの、このお嬢様は。

そんな声が聞こえてくる気がして、桜はぎゅっと唇を噛んだ。

周囲からの視線にも曝されて、彼女は午前中だけでぐったりと疲れてしまった。

そこまで思い出した桜は、ふるふると首を横に振り、ぱんと両手で頬を叩いた。

(だめ！ せっかく仕事に就けたのに、こんなふう落ち込んでいたら)

まず、仕事をできるようにならないと。そうでなければ、沙穂とも同期とも、対等に話せない。

「——鷹司さん？」

ふいに名前を呼ばれた。

「あ……八神課長」

顔を上げると、作業着を着た八神が目の前に立っている。左手にちり取りを持っているのが、あの日と同じだ。

ふわりと微笑んだ彼は、「お疲れさま」と桜の左隣に腰を下ろした。

「いい天気だね。ここでお弁当食べてるの？」

「は、はい……」

桜は中身が半分残っていたお弁当箱を、巾着袋に仕舞い込む。

同期達は社外にランチを食べに行っているそうだ。桜は研修の時から『私達が食べる物じゃ、鷹司さんのお口に合わないわよね』とやんわり同席を拒否されている。

社内食堂にも行って見たが、『あの子、社長の娘さんだね。こんなところで何してるの?』とこそ噂されて身の置きどころがない。仕方なくお弁当を作り、人気のない屋上で食べる、に落ち着いたのだ。

桜が一人で食事しているところを見ても、八神には何ら気にする様子がない。にこにここと笑って

いる。

「八神課長も、よくここに来られるんですか？」

そう聞くと、そうだねえと彼は大きく伸びをした。

逞しい二の腕に視線が吸い寄せられる。この腕に抱き上げられた時、しっかりと抱えてくれていたつけ、と桜はぼんやりと思い出した。

「昼食後に、ここで喫煙する社員がいてね。吸い殻が落ちたままになっていることがあるから、定期的に掃除してるんだよ」

「そう、なんですか」

（あの時もそうだったのね。あんな寒い中、掃除していたなんて）

「屋上が綺麗なのは、八神課長のお陰なんですね。ありがとうございます」

桜がぺこりと頭を下げるのを見た八神の口元が、ゆっくりと笑った。

「鷹司さんは素直だね。それは仕事をする上での美点だよ」

「えっ？」

桜が目丸くすると、彼は微笑んだまま言葉を継いだ。

「仕事は最初に型を覚える。自分の考えやしたいやり方を試すのは、型をマスターしてからじゃないといけないよ」

「……はい」

『私はこうしたほうがいいと思います！』と最初から主張して、教えたことを素直に受け取らな

い新人がいるけれど、結局あまり伸びない。仕事のやり方っていうのは、長年の経験でベストな方法に調整されているものが多いからね、ある意味効率化されてるんだ」

大きな右手が、あの時のように桜の頭を撫でた。

「君は今みたいに素直に礼を言えるし、真面目だ。型を覚えるのは地道な作業だけれど、きつことつこつ頑張れると思うよ」

「八神課長……」

柔らかな彼の笑顔を見た桜の胸に、温かさがじわりと沁みる。

（この人は……私を特別扱いしないんだわ……）

『社長の娘だから』と一線を引いて接することはない。ちゃんと桜自身を見て話をしてくれる。

（そう言えば、麻奈さんもそうだった）

ちゃんと自分を見てくれる人がいる。それだけで……頑張れる気がした。さっきまで感じていた焦燥感がすりと解ける。

「ありがとうございます、八神課長。私、頑張ります」

笑顔でそう言うと、八神が「やっと笑ったね」と、ぼんぼんと彼女の肩を軽く叩いた。

「――桜。秘書課はどうだ。お前の指導担当は富永さんだったな。この一週間、何か不都合なこと

はなかったか」

「お祖父様……」

桜は深く溜息をついた。自宅に戻った彼女が食事をしているところに、源一郎が乱入してきたかと思つたら——これだ。

(不都合なんて、言えない)

婚約者の恋人が指導担当だなど、不都合以外の何物でもない。

けれども『三好専務の婚約者』であり、すぐに辞めると思われている桜が、他の役員の秘書になるのは難しいだろう。結婚までのちよつとした社会見学に付き合つてやつてくれ、と真也の秘書である沙穂に依頼してあるのかもしれない。

桜は箸を置き、自分の右横に立つ祖父に向き直つた。

「私は新入社員の一人にすぎないんですよ？ 秘書に必要な資格も持っていないし、学ぶべきことが沢山あるんですから、不都合なんて言っている場合じゃないわ」

桜の言葉に、源一郎は颯^{さわ}だらけの右手で顎^{あご}を擦^{こす}つた。

「しかしなあ……お前はほとんど男性と話したことがない。パーティーでも大勢の人は苦手だと逃げ回っているじゃないか。そんなお前がやつていけるのかと心配でならん」

「ひよつとして、お祖父様が保^{たも}つて頼^{たの}んだの？ 私を秘書課につて」

そう聞くと、祖父は不自然なくらいに目を逸^そらした。

(やっぱり。後で兄^{にい}様に謝らないと)

会長となり第一線を退^{しりぞ}いた後も変わらず、ビジネス界の巨星と言われている人物には、相^あ応^おしない振り舞^まいだ。

『会長の親^{おや}ばか……いえ、爺^{じい}ばかは今に始^はまったことじゃないし』

麻奈のセリフが心を過^こる。

本当に祖父は自分に甘い。けれど、祖父が保^{たも}つて頼^{たの}んで桜を秘書課に入れるよう取り計^はらつたのなら、すぐに部署を変えてくれとは言えない。

(真也さんと沙穂さんのことは、やっぱり伏せておいたほうがいいわね)

「お祖父様。私は新入社員として仕事を覚えたいの。心配してくれる気持ちはとても嬉しいし、我^{わが}儘^{まま}を言った私を就職させてくれたことも感謝してる。だけど、会社で特別扱^{とくべつ}いするのはやめてね」

桜がにっこり笑つてそう告げると、源一郎は「ううむ……」と呻^{うな}きながらも頷^{うなづ}く。

けれど、その後「成人式の写真を社員に見せるのもやめてほしい」と頼^{たの}んだのには、「何を言うか。お前の写真は小学生の頃から自慢しておる」と返され、すでに手遅れだったと気付いた桜だった。

2. 沙穂の企みと真也の真意

秘書課に配属されてから、一か月半後。

「——鷹司さん、会議用の資料三十部コピーお願い」

「はい、分かりました」

沙穂から書類の束を受け取った桜は、急いでコピー機の前に行った。コピーをしている間に、後ろから声が聞こえる。

「そろそろ真中さんも打ち合わせに出席して、資料管理を手伝ってもらえる？」

「はい！ 分かりました！」

振り返ると、指導担当の先輩をキラキラした目で見ている同期の姿があった。

（真中さんも打ち合わせへの出席を許されたのね）

これで桜以外の新人は皆、担当の役員について会議や出張に出る——社外で仕事をするようになったのだ。

秘書を目指して入社した同期達と、就職するつもりはなかった桜との間には、まだ大きな差がある。分かつてはいるものの、胸の奥がちくりと痛んだ。

秘書課に来て以来、桜は毎日必死に仕事を覚えている。

そんな中、真也の秘書である沙穂の外出が多く、細かく業務を教えてもらえないことは、逆にありがたかった。

指示と報告の確認だけで後は放置されているため、沙穂の顔を見る回数は少ない。お陰で、胸をナイフで突き刺されたような、あの痛みを感じることも少なかった。

（目の前にいなければ、落ち着いて対処できる。だって——）

桜は、安藤課長から秘書課についてのレクチャーを最初に受けた時のことを思い出した。

その日、安藤課長は桜の席で、ノートパソコンの画面にWeb掲示板を表示し、桜と交代した。パソコンに向かった彼女は、少し離れて右横に立つ課長の説明に耳を傾ける。

「秘書課のメンバーはこのWeb掲示板に予定を書き込むことになっているんだ。鷹司さんも記入してみて。今日の午後から説明会、と。私は自席から確認するよ」

「はい、分かりました」

安藤課長が立ち去った後、表示中のURLをブックマークし、改めて掲示板を見た。縦軸がメンバーの名前、横軸が時間帯になっている表には、各秘書達の予定が箇条書きで書かれている。

桜は自分の名前を探そうと画面をスクロールさせ——ある予定で指を止めた。

——富永沙穂 13:00-17:30 三神カンパニー、三好専務同行——

(真也さんと、外出……?)

心臓に重い衝撃が走る。息ができない。ひゅ、ひゅ、と短い音が桜の唇から漏れた。

黒いマウスを持つ右手が完全に強張る。あの日ドアの隙間から見えた、二人の抱き合う姿が、まざまざと甦った。

『彼女は何もできない、綺麗で可愛いお人形だ』

『……悪い人ね。結婚しても私とこんなこと、するつもりなんでしょう？ 彼女が知ったら、どうなるかしらね?』

広い背中、細い指が白いワイシャツに食い込んで――

(あ……あ……)

「う……」

――嫌っ……!!

「大丈夫」

桜が叫びそうになった瞬間、冷たくなった右手に温かい大きな手が重なった。

「え……?」

桜は重ねられた手を見る。

四角い爪の先は黒い。手首にかかる長袖の色は灰青色だ。

ゆっくりと振り向くと、もさつとした前髪の八神が桜の後ろに立っていた。

「ほら、ここだよ」

桜よりも太い指がマウスを操作する。するとスクロールされた画面は、彼女の名前が載っている箇所が変わった。

「八……神課長……」

彼の左手が、桜の背中をゆっくりと擦る。

「ゆっくり息を吐いて」

「ふ、う……っ……」

ようやく吐けた息と共に、身体の力が抜けていく。パソコンの画面が少し滲んで見えた。

「八神君? 鷹司さんと知り合ってたのかい?」

その声とともに、すつと背中から八神の感触が消える。彼は桜の手からマウスを取り上げ、裏向きに持ち上げた。

「ちよつとマウスの動きがおかしかったの。ああ、電池が切れかかっているね」

上着のポケットから単三電池を取り出して、手際良くマウスの電池を交換する八神。桜はぼうつとしたまま、彼の指の動きを見ていた。

「はい、できたよ。これで大丈夫」

右手の近くに、マウスが置かれる。恐る恐る、彼女はマウスに右手を載せた。そつと動かしてみると、確かにさつきより反応が良くなっている。

「あ、りがとう……ごさいます……」

口籠もりながら礼を言うと、八神はぼんと右手を桜の頭に載せた。

「どういたしました。頑張つてね、鷹司さん」
彼の目は前髪で見えないが、唇は弧を描いている。手をひらひらと振った後、彼は秘書室から出ていった。

その後ろ姿を見ていた桜は、はっと我に返つて画面をもう一度見る。そこにはもう、沙穂の名前は映っていない。

(八神課長……)

『大丈夫』

じわりと胸の奥が温かくなる。自分を励ましてくれたあの言葉。それが今も、心に温かさを伝えていた。

(――私は、大丈夫)

桜は大きく息を吸い、そして吐き出す。ぱしんと両手で頬を叩いた後、自分のスケジュールに入力を始めたのだった。

(――あの時も、八神課長に助けられたのよね)

優しい声と温かい手に桜は救われた。『頑張つて』と彼女を信じて応援してくれた彼に、立派にやり遂げたところを見てもらいたい。そう思うようになっていく。

その後も、当然沙穂のスケジュールを見る機会があった。真也は沙穂を連れての外出が多く、予定を目にする度になきりと胸が痛む。それでも桜は逃げていない。

(辞めないって決めたもの)

そもそも、鷹司コーポレーションに就職した以上、あの二人が一緒にいるのを目撃することは避けられない。幸い、真也は秘書室には顔を出さないので、一緒にいるところをまだ直接見てはいなかった。

(私が、沙穂さんの代わりに同行できる秘書に成長すればいいのよ)

ただのお人形さんだなんて、もう絶対に言われたくない。そして八神課長の期待を裏切りたくない。それが原動力になっている。

(私って、結構意地っ張りだったのね……)

こんなに頑固だったなんて、自分でも知らなかった。

とにかく桜は、余計なことを考える暇がないよう仕事に集中した。書類の整備や資料の配付、他の秘書の手伝いなど、秘書課の外に出ない仕事ばかりでも、真面目に取り組み、雑用も率先して引き受けている。

そんな桜の態度を見て、少しずつだが周囲の姿勢は和らいで……とまではいかなかった。

四人の同期とは、未だ一線を引いた関係のままだ。真面目な仕事ぶりは認めてくれたらしいものの、やはりどこか遠慮がちだった。先輩秘書達も、他の同期と桜とでは、明らかに態度を変える。

なるべく目立たないようにしているつもりだが、それでも他の社員と同じように、とはいかない

のかもしれない。

(すぐには無理でも、そのうちに仲良くなれたら……)

桜が物思いに耽^{ふけ}っている間に、コピー機は止まっていた。彼女はコピーし終わった資料をダブルクリップで留め、会議室に運ぶ。

白いブラウスに紺^{くろ}地のVネックカーディガン、そして同色のタイトスカート姿の桜は、髪を後ろで一つに束ね、なるべく地味な装^{よそお}いを心掛けていた。それでも、廊下を歩いていると、視線を感じる。

(まだ一ヶ月半だもの。頑張らないと)

資料を届けた会議室には、立ち話をしている安藤課長と鷹司保部長の姿があった。桜が社内では従兄^{いとこ}に会ったのは、これが初めてだ。

保は真也と同じくらい背が高い。柔らかな栗色^{あふろ}の髪にたれがちの目をした彼は、セクシー度では社内一だと女性社員に評判だ。もともと、従兄^{いとこ}の一筋縄ではいかない性格を知り尽くしている桜には、その評判はよく分からなかった。

「失礼します」

お辞儀をし、口の字型に設置された机の上に資料を置いていく。

「ああ、桜さん」

保がにっこりと笑って、資料を配り終えた彼女に話し掛けてきた。桜は保の前に立ち、彼を見上げる。

「はい、何でしょうか、保部長」

保は優しい笑みを浮かべた。

「今日の会議のお茶出し、お願いできるかな。桜さんの淹^いれるお茶は美味^{おい}しいから」

(他部署の方の前に初めて出られるんだわ!)

「は、はい!」

桜が勢い良く返事をする、保は隣に立つ安藤課長にこやかに言った。

「彼女、お茶を嗜^{たじな}んでいるし、コーヒーや紅茶を淹^いれるのも上手いんだ。その技量を活かさない手はないと思うな」

気のせいかな、安藤課長の顔色が若干悪くなる。

「そ、そうですね。分かりました。……鷹司さん、お願いします」

「はい、承知いたしました。では、緑茶をお持ちしますね」

お辞儀をして会議室を後にした桜は、足取り軽く秘書課に向かった。

「富永さん」

秘書課に戻った桜は、沙穂の席に近付いた。パソコンのキーボードを叩^{たた}いていた沙穂が顔を上げる。

「資料は全て配り終えました。会議室にお茶を運ぶよう、保部長に頼まれましたので、淹^いれてきますね」

「……保部長が？ あなたに？」

じろりと睨まれた桜は、「はい」と短く答える。すると、沙穂がすつと席を立つ。黒のパンツスーツ姿の彼女が、桜を見下ろして言う。

「じゃあ、お茶はあなたが淹れてもらえるかしら。会議室には私が運びます」
「富永さんが？」

桜は目を見張った。秘書課ではお茶出しの仕事もするが、少なくとも今まで沙穂がしている姿は見たことがない。

「ええ。まだあなたを外に出すわけにはいきませんから」

沙穂がふつと嗤う。桜は弾んでいた気持ちだが、すつと引いていくのを感じた。

「……分かりました。では、用意しますので、お願いいたします」

頭を下げると、秘書課の隣に設置されている給湯室へ向かう。

（まだまだなのに……期待してしまっただめよね）

急須と湯呑を用意しながら、内心で溜息をついた。

今日の会議は経営会議だ。会長、社長以下、部長クラスが出席する。お茶出しとはいえ、秘書課外で初めての仕事だった。

（お祖父様やお父様……それに真也さんに、ちゃんとやっているところを見せられるかも、なんて……）

まだ外に出せない、と沙穂が言うならそうなのだろう。彼女への桜の感情がどうであれ、秘書と

して沙穂が優秀であることは、十分承知している。

こぼこぼこぼ……

ワゴンの上に置いたトレイに湯呑を並べ、桜は沸騰したお湯を入れた。急須に茶葉を入れ、少し冷めたお湯を湯呑から急須に移す。葉が開くのを待つて急須を何回か回し、湯呑に均等に注いでいった。たちまち心地良い香りが立ち昇る。

人数分のお茶を淹れ終わる頃に、沙穂が給湯室に顔を出した。

「用意できたかしら？」

「はい、ちょうど淹れ終わりました」

沙穂はちらと湯呑に目をやり、「ご苦労さま。後片付けもよろしくね」と言っつてワゴンを押していく。桜は「はい」と返事をした後、洗い物を始めた。

「……桜」

「保部長。お疲れさまです」

会議終了後、給湯室で湯呑を洗っていた桜は、入り口付近に保が立っているのを見付けた。いつも穏やかな笑みを浮かべている従兄が眉をひそめている。

（何か不手際でもあったのかしら？）

桜は水道を止め、彼に向き合った。

「どうして桜がお茶を運んでこなかったんだい？」

「え？」

目を丸くする桜を、保がじっと見つめる。

「さっき会議で出たお茶、好評だったよ。いつもよりも美味しいってね」

「あ、ありがとうございます！」

桜は口元を綻ばせた。喜んでもらえたと思うと嬉しくなる。その様子を見た保は、くつと唇を引き締めた。

「やっぱり桜が淹れたんだね。俺はすぐ分かった。祖父さんや伯父さんも欠席でなければ分かったと思う。三好は——気付かなかったようだが……」

「保部長？」

「富永さんが桜の指導担当だったね。安藤課長に聞いた」

苦々しい顔をした彼が、桜に告げる。

「他の役員が『いつもとは違う！ 美味い！』と言った時、彼女は『ありがとうございます。温度に気を付けて淹れてますの』と言っていたよ」

「……っ」

桜は息を呑んだ。沙穂の言葉は嘘ではない。現に桜はお茶の温度に気を付けたのだから。だが、そのセリフを聞いた役員達はどう思うのかは明白だった。

(ま、さか)

いつもはお茶出しなどしない沙穂が自らやると言ったのは……このため？
(どうして?)

こんなことをしなくても、沙穂が優秀な秘書だということは皆が知っているのに。

「……桜」

保の瞳に鋭い光が宿る。普段の温厚な従兄は、そこにはいなかった。

「人事部長の権限を個人的な感情で使うわけにはいかない。だが、もし——」

「保兄様」

桜は保の言葉を遮る。

「……私は大丈夫です。私の我儘を認めてこの会社に入れてくれたお祖父様やお父様のためにも、頑張るって決めたんです。こうやって心配してくれる保兄様のためにも」

——そして、『大丈夫』と言ってくれた、あの人のためにも。

「もう十分良くしてもらってます。だって秘書課に私が入ったの、お祖父様が保兄様に頼み込んだせいなのでしょう？ ……それだけで特別扱いですもの」

「桜」

困ったような表情を浮かべる保に、桜は小さく微笑んだ。

「自分でどうにもできないことがあれば相談します。だから今は、見守っててもらえると、嬉しいです……保部長」

「……分かった。まったく、頑固なところはじいさん似だな」

保が頭をくしゃりと掻く。少し乱れた前髪が、小さい頃のような。

桜はふふつと笑い、保が立ち去った後で、洗い物を再開したのだった。

終業時刻を知らせるチャイムが鳴った後。

(会議の件はともかく、何とか一日無事に終わったわ……)

薄手の白のカーディガンを羽織り、黒いシオルダーバッグを左肩に掛けた桜は、秘書課を出た。エレベーターホールに向かおうとした時、後ろから声を掛けられる。

「桜」

鋭さの混ざったその声に、どきんと心臓が動き、桜はゆっくりと後ろを振り返った。

黒いトレンチコートを着た真也が、二メートルほど向こうにいる。立ち止まった桜のもとに、かつんかつんと音を立てて近付いてきた。

桜の目の前まで来た彼は、薄い唇を引き締めている。オールバックに上げた前髪が幾本かばらりと落ちていて、その様子が男の色気を醸し出していた。

「……三好専務」

入社以来、会社で会うのは初めてだ。そして二人きりで話すのも久しぶり。忙しいと言い訳して、

桜が会わないようにしていたのだ。

真也は桜をむすつとした顔で見下ろす。

「いつまでこんなことをしているつもりだ？」

「えっ？」

桜が目を見張ると、彼は苛立たし気に話を続ける。

「さ……富永に聞いた。秘書課に入った新人のうち、一番出来が悪いんだろ？」

沙穂。真也はそう言いかけたのだ。桜の身体から、ゆっくりと体温が奪われていく。

「未だに役員の出張に同行もできない。任せられるのは雑務だけだと。教えるほうが大変だと言われた」

彼の言葉は、嘘というわけではない。桜がしている仕事は、秘書課内の雑用ばかりだ。

「働く必要などないだろう。卒業後すぐに結婚する予定だった桜が、エリート揃いの秘書課でやっていけるとは思えない。大方、会長あたりが保部長に手を回したんだろうが」

眉をひそめたまま、真也が言う。就職すると言い出すまで、こんな不機嫌そうな彼の顔を見たことがなかった。いつでも微笑んでいて——愛されていると勘違いするぐらい優しくかった。あの頃の、真也と沙穂を見る前の桜だったら、こんな彼に怯えて、何も言えなくなったに違いない。

(だけど、今の私は違う)

桜はぐつとお腹に力を入れる。

「……働きたいんです。確かに私は今まで何の準備もしていませんでしたから、一番出来が悪いか

もしれません。でも、真剣に取り組んでいます。少しずつですが、任される仕事も増えているんです」

そう言い返すと、真也がすっと目を細めた。

「えらく生意気な口を叩くようになったんだな。素直で可愛かったのに」

『綺麗で可愛いお人形だ』

あの時の真也の言葉が、頭の中でリピートする。

（お人形みたいな私は、好きじゃないくせに）

彼が好きなのは大人の女性——沙穂だ。

桜がぎゅっと唇を噛んで俯くと、背中の中のほうからのんびりとした声が聞こえてきた。

「——今でも鷹司さんは可愛いよ、三好専務」

真也が息を呑む音が聞こえる。

桜の左肩がぼんと叩かれた。顔を向けると、もさつとした前髪の男性が視界に入った。今の彼は作業着ではなく、ライトグレーのスーツの上からベージュのトレンチコートを羽織っている。

「八神、課長」

桜が小さくそう呼ぶと、真也の纏う空気が真冬みたいに冷たくなった。八神が彼女の隣に立ち、

真也と向かい合う。

切れるような鋭い雰囲気の本也に、ふわりとした感じの八神。二人はほぼ同じ体格だが、受ける印象がまるで違う。

「八神？ お前、桜と知り合いなのか？」

「工作上、俺の顔が広いのはお前だって知ってるだろう、三好」

八神の声は穏やかで、いつもと変わらない。一方、真也はふんとぼかにした態度で嗤う。

「備品在庫課か。負け犬のお前にはびったりだよな」

「俺は今の仕事を気に入ってる。前よりもやりがいがあるからな。……それはそうと、三好」

静かな口調で八神が話し始めた。

「婚約者が自立したいと頑張っているんだろ。そこは応援すべきじゃないのか」

すると、真也が苦虫を噛み潰したような顔になる。

「聞いていたのか。趣味悪いな」

そう言われても、八神の飄々とした態度はそのままだ。

「聞こえたんだ。それより、鷹司さんは真面目で、目立たない仕事にも手を抜かないし、丁寧にや
り遂げている。慣れてくれば大化けすると思うがな」

「八神課長……」

八神は自分の仕事ぶりを評価してくれている。そう感じた桜の胸の底がほわんと温かくなった。けれど、真也の瞳はぎらりと光る。彼は八神を見た後、桜に視線を移し、ふっと唇を緩めた。

「桜、今から食事に行こう。仕事のこともちゃんと話したい」

「私、は」

何故だろう。真也の食事の誘いが以前はあんなに嬉しかったのに、今は戸惑いのほうが大きい。

自分に差し出された右手を見て、桜は一步後ずさった。真也の口元がぴくりと動く。

「桜——」

その時、新たに涼やかな声があった。

「三好専務、ここにいらつしやったのですか」

どくん……

一瞬、桜の視界がぶれる。

真也が右手を下ろし後ろを振り向く。黒のパンツスーツを身に纏った沙穂が、こちらに近付いてくるところだった。

「……富永」

どくん、どくん……

桜は声が出せず、身体も動かない。

「明日の予定を言い忘れておりました……あら、鷹司さんに八神課長」

くすりと笑う沙穂の唇に塗られたルージュが、やたらと紅く見える。真也の隣に立つ彼女は、桜よりもずっと大人の女性で……そして美男美女の二人はお似合いだった。

どくん、どくん、どくん……

シオルダーバッグの紐を持つ桜の左手が強張る。

「こんなところに突っ立って、何をしているの？ 三好専務に用事でも？」

声に嘲りの色が混ざっているのは、気のせいじゃない。

桜は目を大きく見開いたまま、悪意に満ちた微笑みを浮かべている沙穂を見た。

(声が、出な……)

次の瞬間、広い胸に肩をふわりと引き寄せられる。

「一緒にお茶でもどうかなくて誘ってたんだよ。ねえ、桜さん？」

(え?)

桜が顔を上げると、すぐ間近に八神の顔があった。長い前髪の隙間から見える綺麗な瞳に、さつきとは違う意味で心臓が跳ねる。

「八神っ!？」

真也が声を荒らげると、八神はそちらに顔を向けた。

「秘書がお呼びですよ、三好専務。では、俺達はどこで」

「八神、貴様っ……!」

一歩前に出ようとした真也の右の二の腕に、沙穂の手が触れる。

「専務、こちらがスケジュールですわ」

黒い上着に食い込む白い指に、桜は視線を奪われた。けれど真也の視線が沙穂に向いた瞬間、右手首を温かい手に掴まれる。

「行くよ、桜さん」

八神が桜を引っ張るように歩き始める。

「は、い……」